
魔術師ルカの一生

甘味蜂蜜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術師ルカの一生

【Nコード】

N6388Z

【作者名】

甘味蜂蜜

【あらすじ】

両親も友達も居ない、お金も財産も無い。唯一の味方は歳が二つ程離れた兄だけ。しかしそんな兄も昨晩かえらぬ人となってしまい、少女瑠夏は絶望の淵に立たされていた。更に少女の背中を押したのは役所の役員からの、引き取り手の居ない子供は施設に入らなければならぬ、という言葉。荷物をまとめた少女はアパートの隣人に全てを託して、この世を去る。享年15歳。嗚呼、これでやっとあの世へ行ける……。そう思いながらゆっくり瞳を開けると、なんとそこには兄と瓜二つな青髪の青年が居た……。

死神は大鎌を振り下ろす

白い白い石の前で、少女はただ一人泣き続ていた。

―死神は誰に対しても無慈悲で、ただただ自分の使命を全うするだけ。

確かどこかに書物にはそう書いてあったはずだ。そんな事を頭の隅で考えながら、少女は目の前の石に刻まれている一人の青年の名前を、ただ愛おしげに、悲しげになぞった。

「昨晚急に発作を起こして…」

「ああ…あその兄ちゃんは昔頃から身体が弱かったからなあ…」

少女から一步下がった所に居る大人達はひそひそと言葉を交わす。そしてそんな大人達から一人、こちらに向かってくる大人が居た。

「…^{るか}瑠夏ちゃん…」

役所の人だよ。そう声をかけてくれたのは、少女と最も親しかったアパートの隣に住む老人。役所の役員は憐れむ様な瞳で少女瑠夏の事を見つめると、深く深く頭を下げた。慈悲の意をこめて。

「君が…杉本瑠夏ちゃんていいよね？」

役員は黒いスーツを着ていた。喪服のつもりだろうか。

「……はい、そうです」

ぽつりとそう呟くと、役員はホッとした様な笑みを浮かべる。

瑠夏はそんな役員の様子でさえ、無表情で見つめる。彼女は、変わ

ってしまったのだ。唯一の肉親である兄が死んでしまった、その日から。

「私…施設送りですって」

幾つかの段ボールが瑠夏とその兄が借りていたアパートの一室に、無造作に置かれている。最後にと、瑠夏が何もない部屋に招待したのはあの老人はだった。

「…そうかい…ここもまた寂しくなっちゃうねえ…」

老人はすっかりぬるくなってしまったお茶にようやく手をつける。そんな老人の動作を見ていた瑠夏は、ぽつり、ぽつりと言葉を発する。

「…この荷物、もう要らない物なのでお爺ちゃんに全て差し上げます」

「…え？」

「今までありがとうございました」

おぼつかない足取りで小さなベランダに向かって足を進める瑠夏に、老人は急いで飲んでいたお茶を勢いよくテーブルに置く。

「…は、はやまるな瑠夏ちゃん！」

「…もう、無理です」

ベランダに足をかけた状態で、瑠夏は、本当に小さな笑みを浮かべてこう言った。

「さようなら」

その瞬間、一人の少女の体は、重力に従ってそのまま下へと落下していった。

それが瑠夏の、最期の瞬間だった。

ずれていく

「…カ…ルカ……」

…自分の名前を呼ぶ、誰かの声がする…。それに気付いたのはつい先ほどの事。声の持ち主は何度も、何度も自分の名前を呼ぶ。

「様…もうお止めに…て…」

「…でも…ルカ…なら……！」

鼻につくのは甘い香り。それは瑠夏が先ほどまで住んでいたアパートの匂いではない。ましてや病院の匂いでもない。

不思議に思ってゆつくりと瞳を開くと、そこには二人の青年が居た。二人とも目を開いた瑠夏には気付いておらず、何やら言い争いをしている様だった。

どこかのテレビにでも出てきそうな程、容姿が整っている二人に瑠夏は思わずぐくりと喉をならす。

瑠夏に背を向けている二人が何を言っているのか相変わらず分からなかったが、瑠夏は二人の後ろ姿を見てふと感じる事があった。

青髪をした青年と、茶髪をした青年。

茶髪をした青年は長い髪をポニーテールにしていて彼に見覚えは無かったものの、青髪をした青年の方は、どうも…見覚えがあった。

「…瑠李…お兄…ちゃん……？」

ぴくりと。二人の会話が止み、視線がこちらに向けられる。

「…ルカ…ルカ…なのか…！？」

「…おに…ちゃ……」

こちらを振り向いた青髪をした青年は紛れもなく兄の容姿そのもので。自らが兄と呼んだ青年は、目を覚ましたばかりの瑠夏の体を力強く抱きしめた。

「っ良かった…！もう…目覚めないのかと思ってた…！！」

「…目覚め…ない…？」

「どこか体は痛むか？動かない所はあるか？」

矢継早にと投げかけられる問いに、どこか焦点の合っていない様な、そんなぼんやりとした瑠夏の思考ではついていく事ができなかった。

「…っルイ様！」

「うおお！？」

「ル力様はまだお目覚めになったばかりですよ！全く、少しは自重してください」

「なんだよライ、兄弟の感動の再会を邪魔しやがって！そういうお前はル力が目覚めて嬉しくないのかよ！？」

「お気持ちは察しますがせめてルイ様の馬鹿力でル力様を抱きしめないでください！ル力様が潰れます…！！」

どうやら茶髪をした青年は、眼鏡をかけていた様だ。長いポニーテールを揺らしながらそう抗議する彼に、自分が兄と呼んだ青年は不機嫌そうな顔をしながら抗議する。

二人って仲いいんだな…と思うと同時に、瑠夏はふと疑問に思った事があった。

「…お兄ちゃん」

髪の色は違えど、見た目はどう見たって兄である瑠李と同じなので、

瑠夏は青髪をした青年をとりあえず自らの兄だと判断する。

「ん？どうしたルカ！」

満面の笑みを浮かべる兄に、瑠夏は困惑した表情を浮かべてこう言った。

「…その…横に居る人は、誰？」
「え？」

茶髪をした青年にちらりと視線を向けてそっぴう瑠夏に、瑠李の顔からは自然と笑みが消える。

対する茶髪をした青年も、何やら今の言葉が相当精神的なショックだったらしく、今にも泣きそうな顔をいていた。

「…お前…何……言ってんだ？」
「それと…」

今度はこちらが矢継早に質問をする番。瑠夏は大きな部屋を見渡すと、兄にこう言った。

「ここは、どこなの？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6388z/>

魔術師ルカの一生

2011年12月21日16時01分発行